



インフォメーション 日本蜘蛛学会第35回大会 (北海道)のお知らせ

日本蜘蛛学会の第35回大会は2003年8月22日から24日まで、大雪国立公園内の糠平温泉文化ホール(〒080-1403 北海道河東郡上士幌町字糠平)を会場として開催されます。北海道では初めての大会ですので、多数の参加をお待ちしております。

日程

- 22日(金) 夜間観察採集会
(ひがし大雪博物館と共催)
- 23日(土) 9:00~12:00 一般講演
13:00~14:00 総会
14:00~15:00 一般講演
15:00~17:30 シンポジウム
(ひがし大雪博物館と共催)
- 17:30~18:10 自然保護委員会
18:30~20:30 懇親会

- 24日(日) 9:00~10:50 一般講演
*11:00に帯広駅行きのバスを用意します。
(講演数などにより時間が変更されることがあります)

問合せ先

〒080-1403

北海道河東郡上士幌町字糠平北区25

松田まゆみ

Tel/Fax 01564-4-2150

第3回日本蜘蛛学会奨励賞

第3回日本蜘蛛学会奨励賞は、日本大学理工学部量子科学研究所博士研究員の桑田隆生さんに決定しました。桑田さんは、ハラフシグモ類とトタテグモ類のヘモシアニンの分子進化的研究が受賞にふさわしいと評価されました。

(吉田 真)



同好会情報

ここでは日本各地にあるクモ同好会で発行されている定期刊行物の内容、採集会や講演会(総会・例会)の日程などを紹介する。興味を持たれた方は入会したり、行事に参加されてはいかがでしょうか。

関西クモ研究会(会長:山野忠清)

・会報「くものいと」を年2回発行。採集会、研究会例会などを年数回実施。

・採集会は、北摂方面を予定。

2003年6月1日(日)、9月21日(日)

・例会は、2003年12月21日(日)に大阪市の四天王寺高校で実施の予定。

くものいと 33号(2003.3.27発行)

特集 クモを撮る

緒方清人:クモの撮影あれこれ



関西クモ研究会の例会とその後の懇親会

加村隆英：実体顕微鏡とデジタルカメラでクモを「お手軽に」撮る

観察・研究報告

船曳和代：昨年姫路で見つけたキジロオヒキグモについて

フィールド紹介

西川喜朗：大峰山系の和佐又山（奈良県吉野郡上北山村西原）

同定指南Ⅶ

加村隆英：ワシグモ科 Gnaphosidae（その6）クモリスト

関根幹夫：信貴山付近のクモ類目録

船曳和代・榎元ともこ：滋賀県天神川のクモ

赤松史憲：採集散策日記～奈良県大和高田市（神社編）～

吉田 真：各地で採集したクモ

関西クモ研究会採集会報告

赤松史憲：京都府八幡市石清水八幡宮周辺
（2002年9月22日）

船曳和代：本の中に見つけた蜘蛛，くも，クモ
吉田 真：吉田哉さんが「日本産ヒメグモ科総説」を出版

関西クモ研究会 2002 年度例会の記録

牧野達也：会計報告

吉田 真：藤井靖浩さんを悼む

会費納入のお願い／お詫びと訂正

珍しい記録（编者注：以下，いずれも昭和 30 年代から 40 年代にかけての新聞記事）

ゴミグモの母親と子供たち

スズミグモ分布の貴重な記録

ムロズミグモを発見した中学生

室積中の科学クラブ

入会申し込み

〒567-8502 茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel： 0726-41-9555（西川研）

0726-41-9550（加村研）

Fax： 0726-41-9432（大学教務課）

会費 年 1000 円

中部蜘蛛懇談会（会長：緒方清人）

会報「蜘蛛」を年 1 回，「まどい」を年 3 回発行。採集会を年 2~4 回，合宿を年 1 回，総会・研究会を年 1 回実施。

・採集観察会は，

2003 年 4 月 29 日（火・みどりの日）

岐阜県可児市内 担当者 須賀瑛文

名鉄広見線可児川駅改札口午前 10 時 30 分集合

2003 年 6 月 1 日（日）

豊田市自然観察の森 担当者 緒方清人

名鉄名古屋本線知立駅改札口午前 8 時 15 分，

または 現地 センター前午前 9 時 30 分集合

2003 年 6 月 22 日 (日)

豊田の森 担当者 杉山時雄, 大原満枝

名鉄名古屋本線知立駅改札口午前 9 時, または
現地 里山学習館「エコの森ハウス」 午前 9
時 30 分集合

いずれの場合も参加希望者は各担当者まで事
前に連絡してください。

蜘蛛 (KUMO) 35 号 (2002. 10. 18 発行)

須賀瑛文: ちょっと覗いたあちこちのクモ～

2000 年～

須賀瑛文・矢崎充彦: 岐阜県でカトウツケオグ
モ採集

益田和昌: 岐阜県加茂郡白川町の倍足類

益田和昌: 愛知県宝飯郡音羽町の倍足類

永井 均: ヨツボシショウジョウグモの産室作
成について

杉山時雄: 観察会で出会ったクモたち

緒方清人: 北陸・東北クモ紀行

緒方清人: ウスアカフサヤスデの小観察

短報

益田和昌: 青森県十和田湖町のクロヒメヤスデ

益田和昌: 名古屋市緑区大高緑地のシマフジヤ
スデ

益田和昌: 名古屋市熱田区熱田神社のヤスデ

益田和昌: 愛知県のウスアカフサヤスデ

益田和昌: 瀬戸市のババヤスデ

緒方清人: ユアギグモを発見する

2001 年度採集観察会, 2002 年度総会・研究報
告会

入会申し込み

〒444-0075 岡崎市伊賀町 4-62-3

板倉泰弘 (事務局)

Tel : 0564-28-5857

E-mail : yasuhi@deluxe.ocn.ne.jp

会費

正会員 年 3000 円 (高校生以下 1000 円)

準会員 「まどい」のみ 1000 円

三重クモ談話会 (本部: 橋本理市)

会報「しのびぐも」を年 1 回発行. 採集会・
合宿・例会などを年数回実施.

・今年度の採集観察会は, 桑名市, 長島町, 木
曾岬町一帯を調査. 毎回 J R 「桑名駅」改札口
前午前 9 時集合. 大雨以外は決行.

2003 年 5 月 25 日 (日)

9 月 21 日 (日)

11 月 2 日 (日)

・夏の採集観察会は, 7 月 26 日 (土) ~27 日
(日) に中部蜘蛛懇談会との合同合宿で, 場所
は未定 (三重県内で開催予定).

・総会兼同定学習会, 懇親会は, 2004 年 5 月,
詳細は後日連絡 (開催日を 5 月に変更).

しのびぐも 30 号 (2003. 3. 31 発行)

記念文集

橋本理市: 三重クモ談話会 30 周年をむかえて

須賀瑛文: 三重クモ談話会 30 周年を祝して

新海 明: 第 30 号発刊に寄せて「夢のまた夢」
とあれこれの思い出

太田定浩: 30 号に寄せて

貝發憲治: 30 年を振り返って

武藤茂忠: 「しのびぐも」30 号によせて

塩崎哲哉: 三重クモ談話会と私

下市昇一: 三重クモ談話会 30 周年によせて

直井通泰: 蜘蛛との出会い

熊田憲一: 三重クモ談話会 30 周年にあたって

研究論文

塩崎哲哉: 三重県熊野市のクモ

橋本理市：孫福正氏の足跡をたどる
杉永 厚：食品工場における衛生害虫のモニターとしてクモを観る

新海明・森谷圭介：円網の作成で使われる糸の長さはどれくらいか，栗林慧氏による「ヤマオニグモ(?)の円網の写真」からわかったこと

徳本 洋：モズの「はやにえ」になったエビチヤコモリグモ

斎藤慎一郎：南方熊楠の女郎蜘蛛

熊田憲一：三重で採集したクモ その2
三重県嬉野地区の採集記録

三重クモ談話会総会記録ならびに桑名地区の合宿採集会

熊田憲一：福井県で採集したクモ 2002年「しのびぐも」総目録(第21号～第30号)(1993年～2003年)

入会申し込み

〒515-0044 三重県松阪市久保町 1843-157
貝發憲治 (事務局)

Tel (Fax) 0598-29-6427

会費 年 3000 円

和歌山クモの会 (会長：米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年1回発行.
総会・観察会を年1回実施.

・採集観察会, 総会などの詳細については未定.

和歌山クモの会会報 No.12 (2002. 9. 30 発行)

内容は, 遊絲 11号を参照のこと.

入会申し込み

〒649-6264 和歌山市新庄 188

和歌山県立和歌山高等学校内
青木敏郎 (事務局)
会費 年 1000 円

東京蜘蛛談話会 (会長：新海栄一)

会報「KISHIDAIA」を年2回, 「談話会通信」を年3回発行. 採集会年4回, 合宿年1回・総会例会などを年2回実施.

・今年度の採集会は, 埼玉県入間市・所沢市の「さいたま緑の森博物館」で実施.

2003年5月11日(日)

7月13日(日)

10月19日(日)

2004年2月15日(日)

西武池袋線小手指駅南口 午前10時10分集合.
世話人 今井正巳 (042-755-3086)

・合宿は,

2003年8月20日(水)～22日(金)

北海道河東郡上士幌町糠平周辺, 日本蜘蛛学会大会に合わせて実施.

宿舎：糠平館観光ホテル

費用：約8000円(1泊3食付き)

申し込み：

〒186-0002 国立市東3-11-18

(有) エコシス 甲野 涼

Fax : 042-501-2652

E-mail : kono-ecosys@h8.dion.ne.jp

・例会は, 2003年11月30日(日)か12月7日(日)の予定.

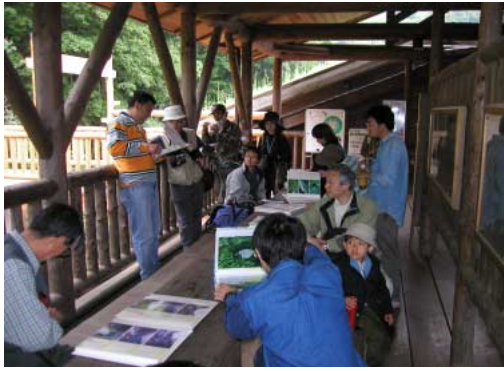
K I S H I D A I A 84号 (2003. 6月発行予定)

追悼 高橋 登氏

高橋 登：東京蜘蛛談話会と私

高橋 登氏年譜および談話会関係活動歴

高橋 登氏クモ関係論文



東京蜘蛛談話会採集会でのクモ合わせ

高橋 登氏提供写真出版物
 高橋 登氏の講演レジュメより採録
 新海栄一：高橋 登君を偲んで
 山川 守：高橋君の思い出
 小野展嗣：いつかどこかで (6) 高橋 登さん
 の急逝に思うこと
 新海 明：高橋 登さんを悼む
 中島晴子：高橋 登さんとローレツ
 池田博明：慈愛のひと
 新村 誠：やさしい笑顔，忘れません
 甲野 涼：高橋 登さんと大井川鉄道
 佐藤幸子：高橋 登さんを偲んで
 貞元己良：高橋 登氏の思い出
 笹岡文雄：高橋 登さんとのこと
 谷川明男：お世話になりました
 徳本 洋：ジョロウグモはどのようにして卵の
 うに付着物をつけるか
 澤田和久：飼育したジョロウグモの記録
 新海 明・平松毅久：西表島クモ観察記 (3)
 池田博明：松田町自然館のクモ観察会
DRAG L I N E S
 新海 明：あいのこトリノフンダマシを発見
 新海 明：シロオビトリノフンダマシの色彩変
 異
 新海 明：ツノナガイソウロウグモの卵のうに
 ついて

佐藤幸子：オオヒメグモの卵のうの作り方
 安田明雄ほか：アカイソウロウグモの卵囊の観
 察

<目録ドラッグラインズ>

工藤泰恵：千葉県産クモ資料

新海 明・谷川明男：島根県で観察したクモ類
 伴 満：岩手県の蜘蛛リスト

水山栄子ほか：川崎市生田緑地のクモ類

福島彬人：田沢湖畔の真正クモ類

新海 明・谷川明男：文献による岩手県クモ類
 目録

新海 明・谷川明男：文献による青森県クモ類
 目録

萩本房枝・新海 明：東京蜘蛛談話会 2002 年
 度合宿報告

入会申し込み

〒186-0002 国立市東 3-11-18-201

(有) エコシス 初芝伸吾 (事務局)

Te1 042-571-1012

E-mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会費 年 3800 円 (学生 2000 円)

関西クモゼミ

1~2 ヶ月に 1 回，滋賀県草津市の立命館大学
 で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先

立命館大学工学部生物工学科 吉田 真

077-561-2660

E-mail: myoshida@se.ritsumei.ac.jp

東京クモゼミ

毎月 1 回，第 1 日曜日に千葉縣市川市の加藤
 宅で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 新海 明 0426-79-3728

または，加藤輝代子 047-373-3344

言いたい！聞きたい！



スパイダーウオーズ外伝 No. 123-126 エクアドル紀行 1-4

吉田 真

No.123 エクアドル紀行 1

「夏休みにエクアドルに行きませんか？」と谷川さんが言う。彼はクモ仲間で、神奈川県の高校の先生である。理科教育に熱心な先生たちが「神奈川生物研究会」をつくり、2年に1回、自主的な海外研修を行っている。この研修旅行に誘われたのだ。

2週間の旅行で67万円はかなり高いが、添乗員付きのバック旅行だからしょうがない。この機会を逃すと一生縁がなさそうな国だから、行くことにした。関西では、ワングモを研究している加村夫妻と Web Art の創始者・船曳さんも参加する。海外旅行が初めてという船曳さんは「何を持っていったらよいだろう」などと、1月頃からソワソワしている。

不精者の私は追いつめられないとやらないたちだから、エクアドルのことなどほとんど頭になかったが、4月頃からそうもいかなかった。まず「予防接種のおすすめ」というのが来た。熱帯だから当然だが、これが6種類もある。コレラ・破傷風・狂犬病・A型肝炎・B型肝炎、それに黄熱病。黄熱以外は2回接種する。しかも、あれとこれは同時にはできず、それとあれは何週間あけて打つとか、なかなかややこしい。全部やるのに2ヶ月以上かかる。

B病院に行き、医者と相談して接種スケジュールを作った。とりあえず、今日は3本打つという。「注射室」で、A型肝炎を右腕に、B型肝炎

炎を左腕に打った。破傷風を打つので、お尻を出してくれと言う。えっ！突然そんなことを言われても、まだ心の準備が…と言ったら、看護婦さんに笑われた。

船曳さんが行った病院は、一日に1本しか打たなかったという。何種類も打つと、おかしくなったときにどれが原因か特定できないためだ。もっともなことだが船曳さんはこのために、10回ほど病院に通ったという。短期間に何種類も打つと、熱を出したり、身体がガタガタになる人も多いらしいが、私は強いのかそれとも鈍いためか、何ともなかった。予防接種に保険はきかないので、1本につき7～8千円！全部で約8万円！

黄熱は京都では打てないので、大阪の検疫所まで行った。生ワクチンで、接種後30分は医者そばにいろと言う。突然ひっくり返ることがあるらしい。恐ろしや。私はもちろん、この言いつけを守らず、難波に買い物に行った。

No. 124 エクアドル紀行 2

7月25日午後3時55分、我々は成田から旅立った。ヒューストンを経てエクアドルの首都キトまで、20時間の旅である。コンチネンタル航空の乗務員は、日本のパーサー（スチュワーデス）とは大違い。若くも美しくもない（といったらセクハラか？）大女のおばさんがこわい顔をして、炭バサミでぼいぼいと、お手拭きを配って歩く。背の高いおじさんが、「飲み物は何ですかあ？」と尋ねてくる。米国では組合が強いから、年を食ってもこのような職場で働けるのだそう。私としては、若く美しい女性の方がもちろん好きだが、そんなキレイどころばかりしか務まらない職場というのもどうかと思う。若さと美貌を売りにする日本の方が、むしろセクハラではないのか。というわけで大女のおば

さんでも我慢するけど、こわい顔はしないで欲しい。客商売だろ、あんた！

ここの機内食はすごい。ビーフはかさかさ、サラダはまるでトリのエサ。よくもこれだけまずいものを次から次と出してくるものだ。しかも恐ろしく量が多い。しかしこれも航空運賃のうちだから、断固たる決意を込めて私は食べきった。アメリカ人の味覚というか、味音痴ぶりが分かるというものだ。ヒューストンまでの11時間の間に、3回も機内食が出て、そのたびに起こされた。おまけに椅子が堅くて足が痛く、なかなか眠れない。エコノミークラス症候群になりそう。コンチネンタル航空、恐るべし！アミーゴ黒田が眠り方を教えてくれた。浴びるほど酒を飲むに限る！

へろへろになってヒューストン着。ここは米国。誰もが英語で話している（当たり前だ）。犬や猫でもここでは英語で話すのだ（犬はBauBau, 猫はMyaaoと、中学で教わった）。おなかもお尻もびっくりするほど大きい女性が歩いている。小錦の女版だ。何を食べたらあんなに大きくなれるんだろう。

待合室で30分ほど熟睡して元気百倍。乗り継ぎ便でキトに向かう。隣席のおじさんが手荷物の収納に苦労しているので手伝ってやったら、すぐに仲良くなってしまい、キトまでの7時間、おしゃべりしてしまった。おじさんの名はラメッツさん。フランス人でいまはニューヨークに住んでいる。奥さんはキト出身で、里帰りに行く途中である。彼女はスペイン語、彼はフランス語が母国語だが、家では英語とスペイン語で話しているという。彼女に合わせているわけで、フランスの男はやはり優しい。「プロポーズは何語で？」と聞くと、しばらく考えてから、「英語だったと思う、たぶん」。返す刀で、「そういうお前はどうか？英語か日本語か？」ときた。

「女を口説くほど英語はうまくない」と私。

「エクアドル独立運動の英雄、シモン・ボリーバルの誕生日が昨日（7月24日）だったことを知っているか？」と、私は一夜漬けの知識をひけらかす。キト生まれの奥さんはもちろん知っていたが、祭などはしないという。私が出てきた「地球の歩き方」を見ながら、観光スポット、地理、治安など、三人で話が弾んだ。キトを案内してやろうという。「ありがたいが、時間があるかどうか…」と渋っていると、私のスケジュール表を見た彼が、「too busy!」。仕方がないので名刺を交換し、電子メールでの再会を約束して別れた。友を得るのはいいものだ。旅はこうでなくちゃと思う。キト着、午後10時40分（現地時間）。日本とはマイナス14時間の時差である。

No. 125 エクアドル紀行3

キトのセバスチャンホテルに一泊。小さいがおしゃれなスイス風の建物である。祭でもやっているのか、夜遅くまで歌と太鼓の音が聞こえた。寒くて途中で目覚めた。赤道直下とはいえ、ここはアンデス。標高は2,850m。灼熱の日本から来れば、別天地である。朝食のバイキングはうまかった。とくにフルーツとジュースはす



ミンズのロッジ向かいの雲霧林

ばらしい。船曳さんはかわいそうに、長旅の疲れと時差で何も食べられないという。私に言わせれば、半分はコンチネンタル航空のせいである。

数台の車に便乗して、最初の調査地ミンドに向かう。さまざまな店が建ち並ぶキトの街を、黒い排気ガスをまき散らしながら、たくさんの車が走る。とても窓を開けてはいられない。私たちのガイドはパブロさん。ごつくて陽気なエクアドリアンである。サービス精神旺盛で、機関銃のような早口英語で、ここは公園、あれは赤道記念碑などと、次から次へ説明する。ヒアリングの下手な私にはとても辛い。

キト周辺の自然は不毛である。山肌に白茶けた茂みがあちこちにあるが、ちゃんとした森林はない。気温が低く（14～19℃）、雨が少ないためらしい。埃っぽい道を、車は一路北東に向かう。南には雪をいただいたコトバクシ山がそびえ立つ。標高 5,897m、世界でもっとも高い活火山である。アンデス山脈の東面を下っていくと、景観が急変した。森林が現れ、路傍にはランを含むさまざまな花々が咲き乱れている。着生植物も多い。ここは明らかに、アンデスの鞍部よりも高温多湿なのだ。

私たちの要望に応じて、パブロはうっそうとした原生林、森の間を流れる谷川、明るい二次林など、さまざまな場所に私たちを案内してくれた。ミンドの原生林はひどく峻しい山の斜面にあり、私たちは大汗をかきながらそこに登った。名も知らぬさまざまな樹木。恐竜時代を想起させる背の高い木生のシダ。樹木に着生するさまざまなラン。サトイモの葉そっくりだが、大きさが子供の傘ほどもあるクワズイモの仲間。うっそうとして暗いこの森は、何か神聖なものを感じる場所であった。

植物班と鳥班が次々に新たな発見をして驚喜



ミンドで見たミクラテナ属のクモ

しているにもかかわらず、我々クモ班の意気は上がらない。クモがあまりいないのだ。巨大なタランチュラや、色彩豊かな大型のクモが、熱帯にはたくさんいるはずではなかったのか？そういえば、昆虫も少ない。青い巨大なモルフォチョウを見たが、蝶もそんなに多くない。ここは植物と鳥の世界である。虫たちの入る余地はないのだろうか？

No. 126 エクアドル紀行 4

今回は、日本人にあまり馴染みのないこの国を少し紹介しよう。エクアドルは赤道直下に位置する、太平洋に面した南米の小国であり、面積は日本の約4分の3。北はコロンビアと、南はペルーと境を接している。人口はおよそ1,200万人。日本の10分の1である。住民はインディヘナ（インディオ）が25%、ヨーロッパ系白人が10%、混血であるメスティソが55%を占める。言語は基本的にはスペイン語であり、住居もスペイン風のものが目立つ。宗教はローマ・カトリックが大部分である。

国土の中央を南北に走るアンデス山脈によって、エクアドルは3つの部分に分けられる。コスタ（海岸地方）、シエラ（中央アンデス）、そしてオリエンテ（東部熱帯低地）。シエラは4,000～6,000m級の万年雪を頂いた山々に囲

まれた涼しい地方であり、首都キトもここにある。コスタは海岸沿いの地方であるが、寒流であるフンボルト海流のために、思いの外涼しいらしい。港町グアキアルは人口 200 万人、エクアドル最大の都市であるが、7月の最高気温は 28 度くらいだという。本土から西に約 800 キロほど行くと、有名なガラパゴス諸島があるが、ここもエクアドル領となっている。オリエンテは、人口密度の低い熱帯雨林。アマゾン川の源流である。

エクアドルの歴史は古い。すでに紀元前 3,000 年前の地層から、独特な文様の土器や土偶が発掘されている。奇妙なことにこれらは、日本の縄文時代のものと同じくらい似ているという。その後、文明は各地に広がり、海岸地方、山岳、アマゾンの各文明間の貿易も盛んに行われた。

14 世紀になって、ペルーのクスコを首都としたインカ帝国が急速に膨張し、エクアドルの海岸から山岳地帯を支配していた部族を次々と併合していった。インカは、コロンビア国境からチリ北部に至る南北 4,000 km におよぶ大帝国となったのである。

インカ王ワイナ・カバックの死後、その息子であるアタワルパとワスカルの間で王位継承をめぐる争いが起こり、長期にわたる内戦が勃発した。この戦いはアタワルパの勝利に終わったが、この混乱の最中にフランシスコ・ピサロが率いるスペイン軍がツンベスに上陸し、アタワルパを捕らえてインカ帝国を滅亡させたのである。百数十名に過ぎないスペイン軍が数万に達するインカ軍を破った理由は、いろいろに論じられている。謀略を使って国王アタワルパを捕らえてしまったこと、インカ文明が銃器を持っていなかったこと、等々。単純素朴であったインカは、戦いの駆け引きや悪知恵に長けたスペ

イン人の謀略にしてやられたのだ。

エクアドルはスペインの植民地とされ、スペイン語の使用とキリスト教を強制された。インカ風の建物は壊され、スペイン風の建物が次々と建てられた（ペルーを襲った大地震で、スペイン風の建物のほとんどが倒壊し、石を積んだだけのインカ風の建物が倒れなかったのは、歴史の皮肉である）。

19 世紀に入って、ラテンアメリカ各地に独立の気運が高まり、エクアドルでもシモン・ボリーバルなどが独立運動を指揮した。エクアドルは 1830 年に独立し、現在に至っている。

No.127 エクアドル紀行 5

光る虫と言えば、日本ではゲンジボタルとヘイケボタルが有名である。京都でも、哲学の道を歩けば、露の晴れ間に飛び交うゲンジボタルを見ることができる。東北の城下町で育った私は、子供の頃、浴衣を着て小川の縁をそぞろ歩き、団扇を使って螢を掴まえた。兄と一緒に蚊帳の中に放したホタルたちは、幻想的な淡い光を放っていた。「螢狩り」は遠き日の思い出である。

ところ変われば、品変わる。ミンドで見た螢は、そんな風情のあるものではなかった。暗闇の中で一瞬だけピカッと光る。まるでフラッシュをたいたような、強力な光である。しばらくすると、別な場所でまた、ピカッと光る。ムードも何もない。それにしても、あんな小さな虫が、どうしてあんな強力な光を発することができるのだろうか？

エクアドル遠征メンバーの一人である高橋さんは、「光り物」が大好きな高校の先生である。ある晩彼は興奮して、我々の部屋に飛び込んできた。「夜行列車虫」を見つけたという。夜行列車虫は細長いツチボタルで、南米のものは頭に

2つの赤い光を、身体の両側には 11 個の緑の光をともしている。小さいながら、歩く姿はまさしく「夜行列車」である。

高橋さんは後日、別な場所でヒカリコメツキを見つけた。ヒカリコメツキは 3 cm ほどもある大型の虫で、ホタルの仲間ではなく、分類学的にはコメツキムシ科に属している。頭には一對の緑の光があり、腹部はオレンジに光る。ヒカリコメツキにはおもしろいエピソードがある。昔、イギリス軍が初めてキューバに上陸したときのことである。ある晩、胸騒ぎした司令官が暗闇に目を凝らすと、森の中に淡く輝く無数の目が見えた。「我々は包囲されているぞ！」イギリス人たちはそれを、松明を持った無数のスペイン兵士と考え、キューバから撤退したのである。ヒカリコメツキはまさに、「歴史を変えた昆虫」である。

ホタルが光る理由は、昔からさまざまに論じられてきた。現在ではそれが、雌雄の風変わりなコミュニケーションの手段であることが分かっている。オスが飛びながら点滅する光を発すると、草の上などに止まっているメスは一定の間隔をおいて点滅し、それに応える。これは、暗闇の中で雌雄が巡り会うロマンチックで有効な手段なのだ。

ミンドでは、数種類のホタルが同じ場所に住んでいる。このような場合、情報伝達の混乱はないのだろうか？ 高橋さんによれば、光の強さや色、リズムの違いによって、同じ種類の雄と雌だけが互いに反応するようになっているという。オスは種類によって、一瞬だけ強く光るもの、飛びながらタ・タ・タ……タ・タ・タ……とモールス信号のような光り方をするもの、暗闇に光で J の字を描くものなど、さまざまである。メスはそれを見ながら、自分と同じ種類のオスにだけ反応すればいい。メスもまた、オス

が誤認しないように、種類ごとに特有の光り方をして、同じ種類のオスに自分がどこにいるか知らせるのである。

最後に恐ろしい(?)話を一つ。トーマス・ムーフェット(1553-1603)によれば、ホタルをすりつぶして「葡萄酒にて飲めば、性欲単に衰えるのみならず厭うほどになり…それ故、言うもはばからる欲情で人妻もやもめも妻もかまわず汚す不潔な淫乱の輩の度重なるホタル酒服用によりて不能となること、大いに望まじきことなり」という。誰か、ダンナに飲ませて実験してみますか？

採集情報

日本各地で採集された、稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

スズミグモ

埼玉県東松山市岩殿 2002 年 6 月 24 日
幼体 1 平松毅久

ミヤシタイソウロウグモ

長崎県下県郡峰町木坂(対馬) 2000 年 5 月 7 日
♂成体 1, ♂亜成体 1, ♀亜成体 1 平松毅久

オガタオニグモ

徳島県海部郡海部町高園 2002 年 7 月 28 日
♀幼体 1 平松毅久
千葉県野田市理窓公園 2003 年 4 月 22 日 ♂
1 八幡明彦 (谷川註:これが雄の初めての発見です)

ミナミオダカグモ

鹿児島県加治木町龍門の滝 2002年8月23日

♂1 八幡明彦

鹿児島県加治木町中福良 2002年11月25日

♀1 八幡明彦

(新海 明・谷川明男)



ミナミオダカグモ



新刊紹介

「日本産ヒメグモ科総説」

吉田 哉さんの学位論文の一部を成す「日本産ヒメグモ科総説」が出版された。専門的な論文であるが、高いデザインセンスによって非常に見やすく仕上がっている。中身は吉田さんがこれまでヒメグモ科のクモについて行ってきた研究の集大成で、日本産のヒメグモ科のクモ類のすべて、35属122種について538の線画、68の写真を伴って記述されている。大型の図鑑が

最後に出版されたのは14年前のことである。

その後たくさんの分類学的新知見が発表されてきた。しかし、それらはいくつもの別々の論文に分散していたので、標本の同定にあたっては、あちこちの論文を見なくてはならなかった。しかし、これさえあればヒメグモ科のクモ類の同定は極めて効率的に行うことができる。いま同定しようとしているクモがヒメグモ科のクモであれば、この本を見ればよいのだ。

ヒメグモ科のクモを同定する機会のある方（まず全てのクモ屋さんが該当するだろう）が、この本を持っていないということは考えられないことであろう。

「日本産ヒメグモ科総説」吉田哉著、日本蜘蛛学会発行。ISBN4-9901449-8-8、A4判、224ページ、606図。

代金：1冊4,000円（個人購入は国内送料無料、団体購入および国際郵便は送料等実費）。

郵便振替の口座番号：02240-8-88122、口座名称：吉田哉。

上記郵便振替口座に本の代金を払い込めば本が送られてくる。2冊以上の場合は代金の割引き



があるそうである。

(谷川明男)

最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のある論文をいくつか簡単に紹介する。

① : Tanikawa, A. 2002. Japanese spider of the genus *Zygiella* (Araneae: Araneidae). *Acta Arachnol.*, 51:105–107.

ヤマキレアミグモは *Zygiella montata* (C.L.Koch 1834)に同定されてきたが、正しくは *Zygiella dispar* (Kulczynski 1885)であることを明らかにした。

② : Jäger, P. & Ono, H. 2002. Sparassidae from Japan. II. First *Pseudopoda* species and new *Sinopoda* species (Araneae: Sparassidae: Heteropodinae). *Acta Arachnol.*, 51:109–124.

Pseudopoda kasariana Jäger & Ono 2002 アマミカワリアシダカグモ, *Pseudopoda spirembolus* Jäger & Ono 2002 オキナワカワリアシダカグモ, *Sinopoda albofasciata* Jäger & Ono 2002 シロスジオアシダカグモ, *Sinopoda derivata* Jäger & Ono 2002 シマコアシダカグモ *Sinopoda ogatai* Jäger & Ono 2002 オガタヒメアシダ

カグモを記載。ヒメアシダカグモは *Sinopoda stellata* (Schenkel 1963) に同定されてきたが、新種 *Sinopoda stellatops* Jäger & Ono 2002 として記載。 *Sinopoda koreana* (Paik 1968) トライコアシダカグモを日本から初めて記録した。

③ : Yoshida, H. 2002. Three species of the genus *Robertus* (Araneae: Theridiidae) from Chugoku District, Honshu, Japan. *Acta Arachnol.*, 51:135–137.

Robertus nojimai Yoshida 2002 ノジマモリヒメグモを記載した。

④ : Yoshida, H. 2002. A new species of the genus *Takayus* (Araneae: Theridiidae) from Nagano Prefecture, Central Japan. *Acta Arachnol.*, 51:139–140.

Takayus fujisawai Yoshida 2002 フジサワヒメグモを記載した。

⑤ : Irie, T. 2002. Two new species of the genera *Pholcus* and *Spermophora* (Araneae: Pholcidae) from the Nansei Islands, Japan. *Acta Arachnol.*, 51:141–144.

Pholcus okinawaensis Irie 2002 オキナワユウレイグモと *Spermophora yanbaruensis* Irie 2002 ヤンバルユウレイグモとを追加。

(谷川明男)

新刊紹介

「沖縄クモ図鑑」

谷川明男さんのライフワークとでもいうべき南西諸島のクモ類に関する図鑑がついに出版された。写真の素晴らしさは言うまでもないが、この図鑑の出版によって沖縄のクモ研究はさらに活性化するに違いない。

私も著者と時を同じくして沖縄を度々訪れる



オキナワカワリアシダカグモ



ようになったが、その頃にもっともやっかいだったのが種の同定であった。幸い沖縄を代表するようなオオジョロウグモとかチブサトゲグモ、シロカネイソウロウグモといったクモの生態調査が主な目的であったので、実害は少なかった。しかし、てっきりアカイソウロウグモやシマゴミグモと思っていた種類が実は新種であったり、トゲゴミグモとマルゴミグモ、ヤマシロオニグモとアカアシオニグモなどの区別が判然としなかった。これは沖縄でクモを実際に観察した方なら誰でも感じるように、内地のクモと似て異なるものがたくさん生息しているためだった。一見すればアオオニグモとそっくりなのに、よくみると「なんか変な感じがする」のである。これはチュラオニグモのことである。アズチグモにそっくりなオキナワアズチグモ。ワカバグモと見間違えうばかりのホシズナワカバグモ。ヤリグモなのに卵のうの形がまったく異なっているタニカワヤリグモなどなど数え上げればきりが無い。

那覇の書店や空港にある「沖縄の生物」とい

った本のなかに加えられているクモ類は、内地のクモと誤同定されているものばかりである。無理もない。クモの専門家さえもかつては内地の種類に当てはめて沖縄のクモの同定をしていたのだから。

「沖縄クモ図鑑」の出版はこのような問題を一気に解決してくれるに相違ない。著者は20年も長きにわたり南西諸島に通い続け、彼の地に生息するクモの分類に光明を当てたことはクモ研究者にはつとに有名であろう。南西諸島のクモ類の分類の解明はきわめて進展したが、カラカラグモ類やサラグモ類など未解決の分類群も数多く残っていると聞く。本書が契機になり沖縄のクモ類の分類に手を染める研究者が、地元の沖縄に現われることを大いに期待したい。

最後に、版組などについてはもう少し気配りがほしかった。たとえば、図に付された種名は和名だけでなくせめて学名だけでも添えられていれば、東南アジアなどの諸外国のクモ学者にも販路がより広がっただろう。これは、出版社の意向のようで、著者も大いに不満であったようだ。ささいな点はさておき、南西諸島への探蛛行の必携の書となることは受け合いである。また、座右に置きちよいと眺めながら、沖縄でのクモ探しの小旅行にふけるといっても悪くはなからう。

沖縄クモ図鑑 めずらしい沖縄のクモ217種！
写真・解説 谷川明男 (2003) 文葉社. 96p.
ISBN4-9980907-9-8 本体 2600 円. 著者あてに連絡すれば手渡しの場合 2200 円, 郵送の場合 2500 円で入手できる. 〒248-0025 鎌倉市七里ガ浜東 2-3-1 県立七里ガ浜高等学校 谷川明男

E-mail: dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

(新海 明)



ギャラリー



『この葉っぱゲットオ!』

ツワブキの葉の表面に造網したオオジョロウグモの幼体。オオジョロウグモの分散直後の幼体は、好んで葉の表面に造網する。生息密度の高いところでは、幼体間で条件のよい葉をめぐる競争があるという。(谷川明男)



編集後記

吉田会長からスパイダーウォーズ外伝をいただきました。会員の中には世界各地を旅行した際に観察したクモの記録などを持っておられる方もいることでしょう。紀行文なども含めて遊絲にご投稿下されれば幸いです。

三重クモ談話会が発足 30 周年を迎えられました。県内をくまなく調査しつつきて、得られた成果である「三重県産クモ類目録」もまもなく出版されると聞いています。今後、各地でつぎつぎとこのような報告書が出されれば、日本のクモ相の全体像の解明につながることでしょう。大いに期待したいと思います。(新海 明)

原稿送付先

〒192-0352 八王子市大塚 274-29-603

新海 明まで

E-mail では dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

(谷川明男) まで

発行は、年 2 回 (5 月, 11 月) の予定。締切は発行月の前月末日です。

日本蜘蛛学会

入退会は

庶務幹事

〒990-2484

山形市籠田 2-7-16

吉田 哉

Tel: 023-643-0097

Fax: 023-645-0698

E-mail: araneae@mb.infoweb.ne.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

170-0004 豊島区北大塚 3-12-21

笹岡文雄

E-mail: spydm@big.or.jp

Tel 03-3918-1945

年会費 正会員 7000 円 (学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

図書幹事 渡部 健

ホームページ: <http://www.asahi-net.or.jp/~hi2h-ikd/asjapan/index.htm>

遊絲 第 12 号

2003 年 5 月 25 日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 吉田 真
